

ララ 70 周年記念フォーラム  
「今伝えたいララからのメッセージ」  
報告書



2016年11月30日(水)  
13時30分～17時  
早稲田奉仕園スコットホール講堂  
＜同時開催＞ララ写真展(12時～18時)  
スコットギャラリー

## 【はじめに】

これまで「脱脂粉乳」「学校給食」の代名詞として日本国民に知られていたララ物資。正式名称は”Licensed Agencies for Relief in Asia”。それらの頭文字をとって通称「ララ」(アジア救援公認団体)と呼ばれていた。それは、1946年に米国大統領が公認した民間の人道支援団体であり、北米の日系人を含むクリスチャンからの献身的な寄付や協力によって支えられた。ララは1946年～1952年までの間、総量1万6700余トン、当時の邦貨で400億円相当の救援物資を日本に贈り続けた。その結果、当時の日本人の6分の1(約1400万人)が何らかの恩恵を受けたと言われている。ララに参加したのは米国キリスト教系奉仕団体計13団体。日本側ではジョージ・E・バット博士(Church World Service)、エスター・B・ローズ女史(米国フレンズ奉仕団)、ミカエル・J・マキロップ神父(カトリック戦時救済奉仕団)の3人の宣教師が代表を務めたララ中央委員会が結成され、物資を公平に分配した。日本史上唯一のキリスト教超教派の連携と官民協働による一大事業だったララが今年70周年を迎えるにあたり、本フォーラム開催が計画された。ララの支援を受け、復興を遂げた日本が、国内外においてどのような人道支援を行っていくべきか、この機会にララの基本精神をふり返り、今日の人道支援のあり方を考える場づくりを目指した。

開催当日は、好天に恵まれ、計109名の来場者がフォーラムと写真展を訪れ、遠くは北海道や神戸からも集まった。今回のフォーラムは、セピア色を基調に、70年前の北米クリスチャンによる愛の奉仕と宣教師達による献身的な人道支援に思いを馳せるノスタルジアに対し、現代の人道主義とこれからというコントラストを味わえるような二部構成にした。そこで過去と今をつなぐために用いられたのが『ララの5つの精神』＝「公平性」「自主性」「尊厳」「官民協働」「あらゆる相違を超えた分かち合いと人道主義」である。ララ物資を送り出した米国側と受け手側からの団体代表者による各スピーチに続き、人道支援に関わる登壇者5名がそれぞれの立場から5つのララの基本精神に基づく活動を共有し、今後の支援のあり方について意見を交わした。

フォーラムの後は、写真展会場であるスコットギャラリーに場を移し、手作りのお茶とお菓子をいただきながら写真を囲んで交流の時を持った。交流会では、アトラクションとして早稲田奉仕園ゴスペル講座で学ぶ女性達が明るく力強いゴスペルクワイアを披露し大いに会場を盛り上げ、場の雰囲気と和ませてくれた。

今回、来場者の多くが、ララや上記の宣教師達に何らかの縁のある個人や団体の方々であったせいか、ララの持つ隣人愛の魅力が詰まった温かみのある催しに仕上がった。今回のフォーラムはララに想いを寄せる多くの方々のご協力なしには実現することができなかった。この場を借りて協力して下さった方々、来場者の皆様に感謝の意を表したい。

2016年12月



フォーラム会場 スコットホール



ララ写真展

総合司会：山田貫司 日本キリスト教奉仕団

開会挨拶：長崎哲夫 日本基督教団前総幹事

### 【挨拶要旨】

コリント II 9:8-9 「神はあなたがたがいつもすべての点ですべてのものに十分で、あらゆる善い業に満ちあふれるように、あらゆる恵みをあなたがたに満ちあふれさせることがおできになります。『彼は惜しみなく分け与え、貧しい人に施した。彼の慈しみは永遠に続く。』と書いてあるとおりです」



総合司会 山田氏

私が師事した故中島武夫牧師は、戦前、根岸会館で働かれた後、小諸教会（長野県）で牧会され、戦後、メソジストの真鍋頼一牧師とバット先生を小諸に招いた。バット先生はその小諸での短い滞在中にララ物資事業の最終構想を練られた。中島牧師は、小諸教会での働きと同時に、世田谷区に開設されたバット博士記念養成所に奉仕した。その後、その事業は和泉短期大学（相模原市）設立へつながり、同牧師は、同大学の初代学長兼理事長に就任された。



開会挨拶 長崎氏

私は、バット先生が中心となり、当時の日本人の六分の一を救ったこのララ事業に対して、これまで日本の教会人として、また日本人としても、本日のような感謝を表明する場がなかった。特に旧カナダメソジストの伝道の地であった長野・山梨・静岡では、教会のみならず地元の人々が衣食住の面でララ物資事業の深い恩恵を受けた。その後70年という歳月の隔たりがあったが、ララに参加した北米13団体に改めて感謝の意を表したい。

メソジストの伝道の地であった長野・山梨・静岡では、教会のみならず地元の人々が衣食住の面でララ物資事業の深い恩恵を受けた。その後70年という歳月の隔たりがあったが、ララに参加した北米13団体に改めて感謝の意を表したい。

### 第一部 ララからのメッセージ（13:30～15:00）

- ・映像で見るララ物資「ララからのおくりもの」
- ・ララを送り出した者からのメッセージ：

Rev. John L. McCullough, President and CEO, Church World Service (CWS)

### 【スピーチ要旨】

ララは、第二次世界大戦直後の日本が未曾有の窮状に直面している中、人道支援のために集まった13団体によって始められた。CWSはララ設立メンバーの一員として、当初からララの活動に携わってきた。ララに続いて設立された日本キリスト教奉仕団がその後も活動を続け、今日まで障害者支援に従事されていることは大変素晴らしく、この場で奉仕団との再会を果たせたことを嬉しく思う。



CWS代表 J. McCullough 牧師

1946年は、軍や政府による制限下において、運営が難しい活動であった。あの時代は戦後復興期であるだけでなく、ヨーロッパやアジアにおいて新しい世界秩序が形成された時期だった。ララは市民団体として始まったが、当時のアメリカでは、海外支援活動には大統領、ハリー・トゥルーマンの承認が必要だった。私の知る限り、トゥルーマン元大統領はこの戦後復興支援活動をしぶしぶ許可したと認識している。ララ物資は政府援助ではなく、アメリカのキリスト教徒と日系移民の市民グループが連携協力した人道支援として日本に届けられた。

ララの本部はニューヨークにあり、東京のララ中央委員会は三人の北米宣教師達が代表していた。三人は支援物資を平等且つ公平に配分する使命を遣わされ、そのやり方は、宗教やイデオロギー・民族に関わらず、最も苦境に立たされている人々を対象に最善の支援を届けようとするものであった。ララによって集められ

た献金を、その精神が損なわれない形で支援活動に当ててくれた三人に対して感謝と敬意を表したい。

第二次世界大戦はアメリカと日本を様々な面で分断させた。この大戦が両国にとって歴史上最も痛ましい出来事である一方、私たちはキリスト教精神に基づき、互いを兄弟と思い、神の下では平等であると考えることが出来る。貧しい人々や苦しんでいる人々、そして人間としての尊厳さえ認められずにいる人々に対し、寄り添い支援を届ける力を持てたのも、イエス・キリストを信じる共通の信仰があったからである。

ララと同じく CWS も今年 70 周年を迎える。私達が今日こうして東京に集うことで、1946 年以降の年月を振り返るとともに、変化し続ける私たちの共通のミッションを改めて鑑みることが出来る。この 70 年間、私達は様々な道を歩んできた。そして、2011 年の起きて欲しくはなかった悲劇ではあったが、東日本大震災を機に私達は再び日本に帰って来た。私も 2011 年の甚大な被害を昨日のこのように鮮明に憶えており、また同時に、国内外からの大規模な支援の様子も克明に憶えている。その後、日本が奇跡に近い復興をなし遂げたことは評価に値するが、まだ多くの家族や地域が苦難を強いられ、元の生活を取り戻せていないことも忘れてはならない。

CWS の活動は、第二次大戦後、米国の複数のキリスト教派によって開始され、それは超教派連携協力を代表するものであり、当時、世界最大規模の非政府組織であった。CWS は、助けを必要としている人々に支援と希望を与えるという極めてシンプルな方針の下で設立され、地元の教派、信徒、家族が物資やお金を捧げるための無償で寛大な草の根支援活動として誕生した。そして、瞬く間に、CWS の CROP (Christian Rural Overseas Program) 運動は希望と復興のシンボルとして世界に知られるようになった。人的支援に加え、何百万トンもの食糧が「友情の列車」や「友情の船」によって日本及びヨーロッパに届けられた。また、この運動は、戦争で破壊された国や地域の再建に向けて政府を動かすだけでなく、復興と発展のビジョンを描くよう政府に働きかけた。70 年前にララを機に始まったこの CROP 運動は、今日も続いている。

今日 CWS は 37 の加盟教派・教会組織によって構成され、ヨーロッパ・アフリカ・中東・南アメリカ・北アメリカ・アジアにおいて計 1000 人以上のスタッフが人道支援・開発支援にあたっている。私達のミッションは、信仰に基づく奉仕団体として、飢餓・貧困・難民・災害で苦しむ世界の人々に公平且つ持続可能な支援を届け、コミュニティに変革を起こすことである。本日、私達がララとして活動していた時代の先人達や同宗信徒らの功績を讃えると同時に、日本の仲間達とのエキュメニカル・パートナーシップ（教派を超えた連携協力）を再認識することができることを大変嬉しく思う。そして、本日、将来の人道支援のあり方、誰にとっての支援であるべきかを、ララの功績と指針から得られた教訓を通して、一緒に考え議論していきたいと思う。

#### ・ララの精神を引き継いだ者からのメッセージ：

「バット博士の願いを引き継いで」 宮本和武氏 バット博士記念ホーム統括園長

#### 【講演要旨】

1946 年 11 月 30 日にハワード・スタンスベリー号が横浜に入港したのが、ララのスタートだった。実はその 1 週間前の 23 日は、バット先生の誕生日であった。そこで、現在、私が勤務するバット博士記念ホームでは、毎年 11 月 23 日には地域のお世話になった方々を招いて園遊会を開いている。そのホームも今年、創立 60 周年を迎えた。

私は、48 年前、高校卒業後、バット博士記念ホームに関わり始めた。当初は、施設名に人の名前をつけていることに驚いたが、関係者にバット先生のことを尋ねても誰も会ったこともなく、バット先生がどういう方なのかさえ知らなかった。そんな中で、当時隣接していた現在の和泉短期大学の初代学長



メッセージ 宮本氏

だった故中島武夫先生がバットホームを寝床にしていたため、夜に来られては、バット先生の話をおかかっていた。その後、私はその話を基に、卒論を書くことを決めた。なぜなら、社会福祉従事者、特にキリスト教信仰に基づいた社会福祉を目指して、福祉現場に入ったことから、「キリスト教と社会福祉とは何か？」を考え、バット先生の生涯を見ていく中で、私達が受け継ぐべきものが何かあるかもしれないと思い、調べ始めた。

バット先生の生涯は大きく分けると3つの時期に分けられるだろう。第一期は、日本伝道への志、第二期は戦前における社会福祉実践、そして最後はララ運動の父としてのバット博士の活動である。G. E. Bott 博士は熱心なメソジスト信仰を持つイギリス移民だった両親の下、カナダ・オンタリオ州の小村で生まれた。トロント大学のビクトリア神学校で学んでいた時に第一次世界大戦が始まり、バット博士も義勇兵として出征した。この時、戦争の惨禍に身を置いたことが後のララを立ち上げる原動力となっていた。

第一期の日本伝道への志は、「平和思想を普及すること」「福音を伝えること」「社会連帯の考え方を植え付けること」を目指した。これらの考え方の中からララの精神が芽生えたと考えられる。戦前のバット先生の社会福祉実践は、当時、カナダメソジスト教会が東京東部地区を対象地域として開設した愛隣団、共励館、根岸会館の3つの拠点における活動に見られる。バット博士は、信仰者としての深い喜びと望みとを隣人と共に分かち、黙々と日本のために働いた方であると言われている。日本が参戦していく中、「国家を正すのは宗教家の務めである」とじっと耐え、ついには周囲に説得され、最後の交換船で帰国の途についた。カナダに帰国後、トロント大学から神学博士号を授与された。

戦後、フレンド派（クェーカー）を中心に、人道主義に基づいたアジア救済運動が起こり、米国フレンズ奉仕団のローズ女史が各団体に働きかけたことにより、北米13団体によってララが立ち上げられた。その運動は100万人を超える人々が関わったと言われている。バット博士は、ララに奮闘しながらもカナダ合同教会のセツルメント事業にも関わり、愛隣団育児部として戦災孤児を集め、養育にあたった。この働きが後のキリスト教児童基金 (CCF) 設立につながり、その後、基督教児童福祉会 (CCWA) を経て、現在のチャイルド・ファンド・ジャパンとなる。

私は、60周年を迎えるにあたって、再度、バットホーム設立の経緯を思い起こし、私達の願いは、本日放映された動画の中の「ララの5つの精神」（＝バット先生の願い）であったかもしれないと考えた。「福祉とは何か？」という私の問いに対して、かつて中島先生は「分かち合いである」と答えられた。本当の「分かち合い」とは戦勝国が敗戦国に支援したところに、その基本精神があったのではないかと考える。私達はそのバット先生の想いと願いを受け継ぎながら、日々働きたいと思う。



## 第二部 パネルディスカッション (15:30 ~ 17:00)

「ララの精神を引き継いで：これからの人道支援のあり方」

ファシリテーター：小美野剛 CWS Japan

登壇者：

片山信彦氏 ワールド・ビジョン・ジャパン 常務理事・事務局長

小海光氏 ウェスレー財団 代表理事

齋木満恵氏 日本キリスト教奉仕団 理事

島田茂氏 日本 YMCA 同盟 総主事

山本雅基氏 きぼうのいえ 理事長・施設長



ファシリテーターの小美野氏

第二部は、ディスカッションに先立ち、ララ5つの精神に基づいたテーマを各登壇者が1つずつ担当し、人道支援家としての視点からそれぞれの活動を紹介した。

### ララの精神その1：公平性：救援を必要としているあらゆる人々に「公平」に配分すること。

日本キリスト教奉仕団 理事 齋木満恵氏

ララの事業が終了した1952年に、その精神を引きついで後継団体として「日本国際キリスト教奉仕団」を設立。継続して救援物資の調達と輸送を実施。救援物資の配分を担当した全国社会福祉協議会と官民一体となって、公平・平等をモットーに必要としているあらゆる人々に希望と愛の贈り物を届けた。この官民一体の働きは、クリーンな中で配分が行われたことでも高く評価されている。この評価こそがララの精神がきちんと受け継がれていることを証するものである。

1958年に社会福祉法人の認可を受け、「日本キリスト教奉仕団」と改称した後は、キリスト教の精神に基づき、人種、国籍、宗教の差異を問わず、その利用者の意向を尊重して多様な福祉サービスが総合的に提供されるように創意工夫し、利用者が個人の尊厳を維持しながら自立した生活が地域社会の中で営まれることを目的として活動を行っている。まず、身体障がい者の救援、支援事業に取り組み、1964年からは身体障がい者の職業リハビリテーションを行い、先駆的な職業訓練施設として神奈川県座間市にアガペ授産所を開設し、1974年4月には東京都より身体障がい者板橋福祉工場を受託した。なお、17歳で下半身不随となった自分自身もアガペセンターでの勤務より希望の光を感じた1人である。また、奉仕団は太平洋戦争の償いの業として1980年よりアジア諸国の障がい者処遇のための交換研修プログラムも行っている。

### ララの精神その2：自主性の尊重：ララ実施に際し、外国人は出来るだけ表に出ないで裏方に徹する。配分計画や実施の具体的な活動は日本側にあたってもらうこと。

ワールド・ビジョン・ジャパン 常務理事・事務局長 片山信彦氏

ララ五つの精神のうち、「現地の自主性、主体性」について、ワールド・ビジョンの活動の中から感じていることを述べる。まず、私たちの活動の中で陥りやすいリスクとして、支援者側の目線で現地の支援事業を見てしまうということがある。なので、ララの五つの原則の一つである「現地の方たちの主体性、あるいは自主性を重んじる」ということは、支援する側の論理ではなく支援を受ける側の目線で事業を進めていくことである。これは現在の援助では当たり前の原則になってきているが、ララは70年前からそういうことをしていたことに感動した。

また、緊急人道支援では迅速かつ効果的に事業を実施する必要があるが、そのためには実施体制と、その体制をより良く運営していくということが重要になる。ララ中央委員会の活動は、3名の外国人代表とともに日本人と日本政府が入り、さらにそこにGHQなどが入って、様々なディスカッションを行いながら事業を進めていった。意見や立場の違う者達がそれを超えて一致し活動の主体になっていく。その体制と運営を

ララは実施したのだ。これは今日の援助現場でも全く同じであり、色々な立場の者がパートナーシップを組んで事業にあたらないと成功をもたらすことができないと感じている。昨年、国連で採択されたSDGsにも「パートナーシップ」という言葉があるが、ララは非常に先見性のある原則を持って活動されたことに敬意を表し、この自主性の尊重に感謝している。

**ララの精神その3：尊厳：「ララ物資」を受けることにより、日本人が依頼心を起こしたり、自尊心を無くさないように配慮すること。**

きぼうのいえ理事長・施設長 山本雅基氏

きぼうのいえは日本で唯一のホームレスの方々の看取りの家で、この15年間で260人を送ってきた。NPO活動は、収容と管理、安全、そういったものにとらわれてしまいがちだが、受益者の自由と自己決定権が何よりも尊重されなければならないと思う。

きぼうのいえの特徴は何か？哲学的に言うならば「0人称の世界」だ。私でもない、あなたでもない、そして第三者のone of themでもない。イエス・キリストが十字架についたのは人間のためであり、そこには区別はない。キリストの十字架は0人称としか呼びようがない。この哲学はララ物資からも読み取ることができる。キリストの十字架もララ物資も論理ではなく情熱が、0人称のもとで多くの人を救う源となったのだ。

今の世の中では、常に責任問題、コンプライアンスばかりだが、18歳の情熱が53歳への知恵へと動いたらどうなるか？すごいことができるに決まっている。ララ物資がそうであったように、それが、きぼうのいえの活動の源となっているのだ。皆様が自分の仕事の中に喜びと、神の愛と神のある実行を満たすことができれば、それは大変良いことだ。

**ララの精神その4：民主の自発性：ララはどこまでも民間人の自発的な運動として「官民共同・協働」によって実施すること。**

日本YMCA同盟総主事 島田茂氏

日本YMCAは、世界でユースエンパワメントを一緒に行っていこうと、若者自身が人生を決定し、世界を作っていくというヴィジョンを持っている。その中で今回のテーマであるララというものを考えた時に、一人一人のパッションがなければ、6年間で400億円という金額を集めることも、政府と協働して事業を遂行することも不可能だっただろうという思いを抱いた。そして、ララ3代表をはじめとする多くのアメリカ人が、日本人と平和を守れなかったという罪悪感を持つ中で、この運動が大きく伝わったのではないかとも思った。

1920年代にYMCAは太平洋問題調査会をつくり、戦争回避の道を模索したが、戦時下においては政府に戦争協力することを余儀なくされた。戦後、今度は与える側にならなければならないということで、日本のYMCAはアジア太平洋における歴史的責任を認識しつつ、平和に貢献していくという基本原則を持ち、活動を行ってきた。

キリスト教団体、市民団体等とネットワークを構築し、地域行政とともに、個人が自らの力では解決できない課題、特に青少年の問題に取り組むことが、YMCAの活動の大きな柱としてある。それは阪神淡路大震災時のNGO協働と、各地域の中で東京災害ネットワークボランティアの立ち上げにもつながった。今回の熊本地震でも益城町の2つの避難所の管理運営についても全国から協働支援があった。

アメリカ大統領選に顕著だったナショナリズムの問題が、あたかも戦前のそれと同じように思えることに大きな危機感を覚えている。戦後、ララ物資で力を合わせた者たちが、戦争が起こらないよう力を合わせていく。そこに協働の大切な意味がある。いま多くの困難にある若者達のために私たちは知恵を出し、世の中を変えていかなければならないのだと感じている。

ララの精神その5：人道主義：いつの日か日本が復興を成し遂げた時に、今一度ララの精神を思い出し、今度は日本人が他国の困っている人々に同じような運動を行うようになって欲しい。国家、民族、人種、宗教、政治的イデオロギーなど、あらゆる相違、対立を超えて世界の人々と協力し、分かち合う国民に成長して欲しい。

ウェスレー財団代表理事 小海光氏

人道主義の定義は、一般的には「人間愛を実践し、人類の福祉向上を目指す立場」という解釈でいいと思う。ララの活動を立ち上げ、支えてきたのが人道主義であったことは、多くの資料からも明らかだが、あえてララの人道主義精神の根底にあったキリスト教信仰というものを思い起こしていきたいと思う。

日本でララの歴史が語られる時、しばしばその迅速かつ効果的かつ公平な支援方法やその影響の大きさに光が当たるが、ララの日本での中心的活動家であった3人の宣教師達の、その活動を立ち上げ、支えてきたものは聖書の信仰に根差した愛の働きである。それをもし忘れるならば、この3人の働きを本当に正しく評価し感謝を捧げることはならないのではないかと。ララの活動は日本の文化背景と支援の公平性を考慮しつつ、キリスト教をあえて前に出さずに行ったが、彼らの人道主義の根本にあったものは、聖書の教える人間の命への愛と尊厳だった。国籍や人種、宗教、ジェンダー、ニードの違いに関わらず、全ての人たちは尊重され愛されるべきものだ。これは時代や文化は違えど、普遍性を持つ価値観である。

ウェスレー財団もこのような人道主義を重視し、「Faith, Hope, Love in Action - 信仰と希望と愛を實踐に」というモットーを掲げている。ララの精神の根底にあった人道主義と愛の実践は、多くの日本人の命を救ったが、もっと大切なことは、多くの人々の心を絶望と悲しみから救ったということであり、このことを私たちは忘れずに語り伝えていかなければならない。

宣教師の働きは種を蒔いていく働きだが、人道支援の働きもある意味これと同じだと思う。物資の調達で終わるのではなく、その行いを通して愛の種を心に蒔き続けていくこと。それによって、その人がいつの日か他の人を助けることができるようになること。これこそが人道支援を行う者の願いであると思う。

今日の多様化が進む国際社会での支援を考える時、普遍的価値を持つ人道支援の精神がますます重要な役割を持つだろう。だからこそ、人道主義を正しく理解して行動するリーダーの育成が大切になる。私たちは「サーヴァントリーダー-奉仕の心を持った働き人」を育てていきたいと強く願っている。そして、これがララの蒔いた愛の種を实らせていくことにつながると固く信じている。

## 【ディスカッション】

テーマ1：アメリカではこれ程の大規模な支援計画が民衆によって計画され、実行されてきたが、日本ではなかなかそこまで発展しない。真の人道支援を私たちがこの国で今後、さらに広めるために、私たちは何が出来るのか？

片山

ワールド・ビジョンを例にとると、アメリカの団体は年間1500億円という桁違いの大きな寄付、収入を得ている。同じワールド・ビジョンなのになぜ違うのか自問すると、まず宗教的な背景の違いからの寄付の習慣の有無と税制上の寄付控除の違いに気づく。また、アメリカは市民がコミュニティーを守る意識が高い一方、日本は政府に福祉を頼るといった文化的発想的な違いも理由としてあがり、ひいては日本の社会の深い問いへとつながる。



パネリスト

だが、この日米の違いにあきらめることなく、国際協力や人道支援、特にキリスト者の場合にはキリスト者の生き方を訴え続けていくことが大切だ。ララにあったような熱い想いと信仰、特に日本社会の中でマイノリティーであるクリスチャンがまず熱い想いを持っていくこと、そして一般市民に共感してもらい、日常生活の中で運動に参加しやすい仕組みを作っていくことが、難しいことだが大事になるのではない。

また、国内外を問わず紛争、災害、貧困などの大きな課題は、一人で立ち向かっていくことだけでは解決にはならない。立場や考え方の違う者達が連携する動きを作っていくことが大切だ。まず、キリスト教会から一緒に動いていくようなムーブメントが起こることを願っている。

## 島田

日本社会、とくに地方の支援の現状はやはり行政に依存する型だ。自身の経験からも言えるが、民間のボランティア活動は信頼できないので、有事には行政や赤十字、共同組合を通して支援を受けるという考え方なのだ。以前は街頭募金も効果がない状態だった。そういう状況を改善し、災害時の協働にもつながる市民社会をつくることを目標に、地方行政と民間との災害ボランティアネットワーク会を立ち上げて研修を繰り返した。結果、災害時の募金活動では大きな成果が出るようになった。このように非常に地道な活動を、市民社会作りのためにしていかなければならない。

また、平和活動については、超宗派で集会を持ち、自分達が社会を変えていくのだという意識を育てていかなないと難しいのではないかと。日本 YMCA 同盟では、アジア各国より青年たちを招き、日本の青年たちと一緒に自己の社会との関わりとアクションプラン作りについて研修する地球市民育成プロジェクトを行っているが、そのような市民社会教育が重要だと思っている。

## テーマ2：ララの精神を受け継いで、今後の活動で私たちが大切にすべき事

## 齋木

福祉の現場で、利用者、職員、研修生と共に生活する中で最も大切なことは神の愛だと感じている。ララにより蒔かれたキリストの精神である愛の普遍を、私たちが疎かにしてはいけない。日々の生活の中から、神に出会うことの大切さを次世代に伝えていくことが大切ではないか。

また、ララの精神は日本国民に平和の道を切り開いたが、世界唯一の被爆国である日本は、核の廃止を世界に発信する責任があることを痛感しており、それが個人から発し、大きな動きになることを願っている。やはり、神に出会い、その愛を感じるにより、真っ暗闇の中から生きる息吹を感じられることを大切に日々生活することだ。

## 山本

巨大な民間セクターを作り、政府に頼らなくていいようにする。生涯死ぬまでに3000万なかったらまともな死は迎えられないなどと喧伝されているが、年金を2か月で50万もらえる人が少ないという現状でそれは馬鹿げたことだ。資産家10人から拠出してもらえば民間セクター実現の可能性は高い。

また、いわゆる家族の論理を大切にすれば良いのではないかと。ここで言う家族の論理というのは無償性を意味し、クリスチャンの基本的な原理原則でもある。これと社会を形成している古典的な資本主義を融合させ、現実性を加味した制度の創設が、より良い社会の実現につながる。

## 小海

人格形成が必要な時代だ。人の痛みに共感できること、共感性を幼少時代より育むことは、スキル習得と並びリーダーシップに必要なことだ。人格形成のためのすべての教育で、養育に力を入れる社会が変わって

いくことが大切である。

また、人道支援においては、子供、女性、外国籍、障がい者の視点等が取り入れられていく必要が出てきている。そのためにも様々なバックグラウンドを持った人達が輪の中に入れるように、リーダーシップの機会を与えられるようにしていく必要性が出てきていると思う。

### 小美野

このパネルディスカッションより、ララの5つの精神がどのように実践されてきたのかを知り、また、それをくみ取った上で活動する方向性へ示唆を与えられた。ララの精神は無償の愛を形にしたものだが、それは現在の社会においても随所で見られると思う。ララの支援を受ける日本人がいつか支援を与える側という想いには日本人として心打たれたが、北米からの支援はサープラスではなく自己を分かち行為であったということは、今回の学びとしてあると思う。現在、世界は戦後最悪の人道危機に陥っていると言われている。支援というのは物質的なものでなく、心を繋ぐものだと思うが、愛を持って行動することが社会を変えていく一助になる。それこそがララの精神に触れた私たちが先人から学んで将来に繋げていくべきことではないか。

### 【閉会あいさつ】

総合司会 山田

代表して来場のお礼を申し上げたい。この会をクリスマスプレゼントとして受け止め、神様の愛をもってクリスマスを迎えられたらと思う。信仰、希望、愛のうち愛が最も大切だが、その愛を日本だけでなく、どう海外に示すことが出来るのかということも大事になってくるというのが今日の学びだ。日本が70年間、一度も戦争していない国というのは誇っていいと思う。皆とともに平和が続けられるように祈っていきたい。

### 交流会 (17:00 ~ 18:00) スコットギャラリー

#### フォーラム開催収支報告

| 収入           | 金額        | 支出           |                                 |         |
|--------------|-----------|--------------|---------------------------------|---------|
|              |           | 内訳           | 金額                              |         |
| 協賛金 (計7団体) : | 1,366,960 | 会場、機材使用料     | 99,984                          |         |
| ウェスレー財団      |           | チラシデザイン・印刷費  | 81,648                          |         |
| CWS Japan    |           | ララ紹介動画制作費    | 536,976                         |         |
| 日本基督教団       |           | 報告書、その他各種印刷費 | 59,594                          |         |
| 日本キリスト教奉仕団   |           | 写真展画像購入費     | 21,178                          |         |
| 日本YMCA同盟     |           | 写真展パネル加工費    | 125,107                         |         |
| 早稲田奉仕園       |           | 登壇者謝金        | 65,899                          |         |
| ワールド・ビジョン・   |           | 同時通訳謝金       | 44,548                          |         |
| ジャパン         |           | 記録係謝金        | 15,000                          |         |
| 個人献金 (1名)    |           | 5,000        | 交流会等飲食費                         | 58,089  |
|              |           |              | 記念品製作費                          | 100,000 |
|              |           |              | 記録動画制作費                         | 80,000  |
|              |           |              | 雑費 (消耗品費、通信費、振込手数料、<br>交通費、雑貨等) | 83,937  |
|              | 1,371,960 | 合計           | 1,371,960                       |         |

## ララ 70 周年記念フォーラム関係団体

### 【共催団体】

特定非営利活動法人 CWS Japan (フォーラム事務局)

公益財団法人ウェスレー財団

日本基督教団

社会福祉法人日本キリスト教奉仕団

公益財団法人日本 YMCA 同盟

公益財団法人早稲田奉仕園

### 【後援団体】

社会福祉法人全国社会福祉協議会

### 【協力団体】

American Friends Service Committee

JICA 横浜 海外移住資料館

昭和館

公益財団法人東京 YWCA

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン

東洋英和女学院

日本キリスト教協議会

日本キリスト教児童福祉連盟

日本キリスト教社会事業同盟

公益財団法人日本クリスチャン・アカデミー 関東活動センター

日本福音同盟 (JEA) 援助協力委員会

普連土学園

United Church of Canada

社会福祉法人横須賀基督教社会館

特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン

(50 音順)



フォーラム運営スタッフ